

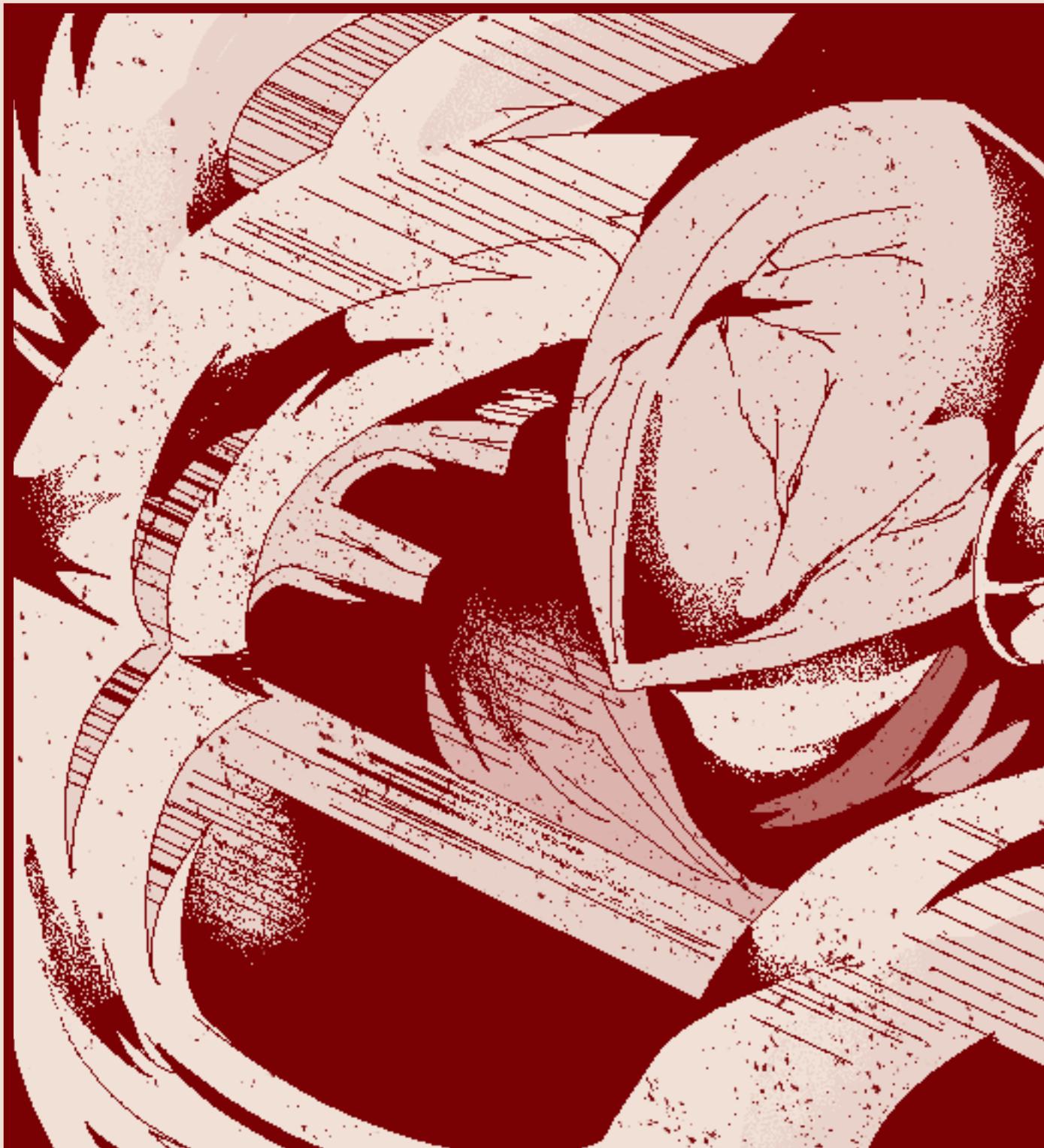
「チッ！やっぱりしんどいな！」

「同じ究極体同士でも！スピリットエボリューションでも！お前みたいなしょぼくれた負け犬と僕と勇太では格が違うんだよ!!!」

ハシュマモンの猛攻に手も足も出ず攻め立てられていた。

カッターの刃の長さを直前に最大刃幅で調整しても瞬間後方に飛び、ギリギリで避けられる。

完全に見切られ、避けた後に数発入れられ完全に弄ばれていた。



(たく、自信なくなるぜ…。)

「なら、こいつならどうだ…!?」

『Form ride blitzarm!』

ジャスティモンがベルトにカードを差し込むと腕のパーツが変わり、電撃が放出される。

「これなら！通るだろ!!!」

しかし、電撃はハシュマモンの不定形な炎にすり抜けていく。

「よりもよって電撃が僕達に効く筈がないだろ!!」

ハシュマモンのラッシュがジャスティモンの装甲を剥がしていく。

吹き飛ばされたジャスティモンがその場で膝を着き蹲っている。

(意識が…、頭がふらつく。)

「くくく、マトリックスエヴォリューションが剥がれなかっただけ大したものじゃないか…でも、もう諦めなよ。」

「はあ、はあ…。」



(諦める…、そうだな…普通そうだよな。)

ジャスティモン…土井 健太郎は脳裏に過去の事を思い出した。  
(昔から、ずっと中途半端な奴だった。

何をしても半端もん…ただ、身体が丈夫で猿みたいに少しほ身軽だからって周りの声にその気になってスーツアクターを目指して…やっと少しほは一丁前になれるかと思ったら、半端な正義心で子供助けようとして車に轢かれて、右手失くして…。

でも…、そうだ…。

経験になるからってやってたデパートのアトラクションーショーのバイト、迷子になって今にも自分が泣きそうなのに、妹の前で必死に我慢してた赤毛のガキンチョ。つい、駆け寄っちまって主任にボロクソ怒られたっけ…。  
でも、でもな…。)





笑ってまともに立てない足を無理矢理ジャスティモンは、立てた。  
「うおおおおおおおおお!!!!!!」  
なんとか右手で殴り掛かろうとするが、ハシュマモンに一笑に付され、軽々しく右手を破壊される。  
「んぐっ!!!??」  
激痛にハシュマモンが目の前にいるにも関わらずそのまま蹲ってしまう。  
(先輩…言ってたな。  
右手失くしても食い下がったら、右手のないヒーローなんてどこにいるんだって。  
その通りだよ…本当に。)  
「ああああああああ!!!!!!」  
もはや掛け声なのかも判断できない金切り音を叫び、ジャスティモンはハシュマモンを攻め立てようとするが、軽々しく躱されてしまう。  
(でもな…でも!!!あの目!俺を…腐りきって…右手を取り戻すために殺しかけた俺を…くだらいい俺を信じてくれたあの目…ヒーローなんて程遠い俺を!ヒーローと信じて見てくれたあの目を…!)  
「裏切る訳にはいかねえんだよ!!!!!!!!!!!!」



「頑張れ…頑張れ!!! ジャスティモン!!!」

車両の子供が届くかも分からぬが叫び出した。

それが堰を切ったように他の子供も大人もデジモンも応援の声をあげはじめた。  
「頑張れ!!! ジャスティモン!!!」

「俺達が付いてる!!!! ジャスティモン!!!」

ジャスティモンがハシュマモンに攻め立てるが、カウンターを入れられるだけで攻撃は当たらない。

「あんな叫んじゃって、醜いったりやないね。」

ハシュマモンの言葉にジャスティモンは、土井 健太郎は、はじめてその声援が耳に入った。

目の前に敵がいる、だけどその声の主達から目を離せられなかった。

「よそ見とは余裕だね!!!」

ハシュマモンの一撃が顔面に入り、吹き飛ばされる筈の一撃をジャスティモンは耐えた。

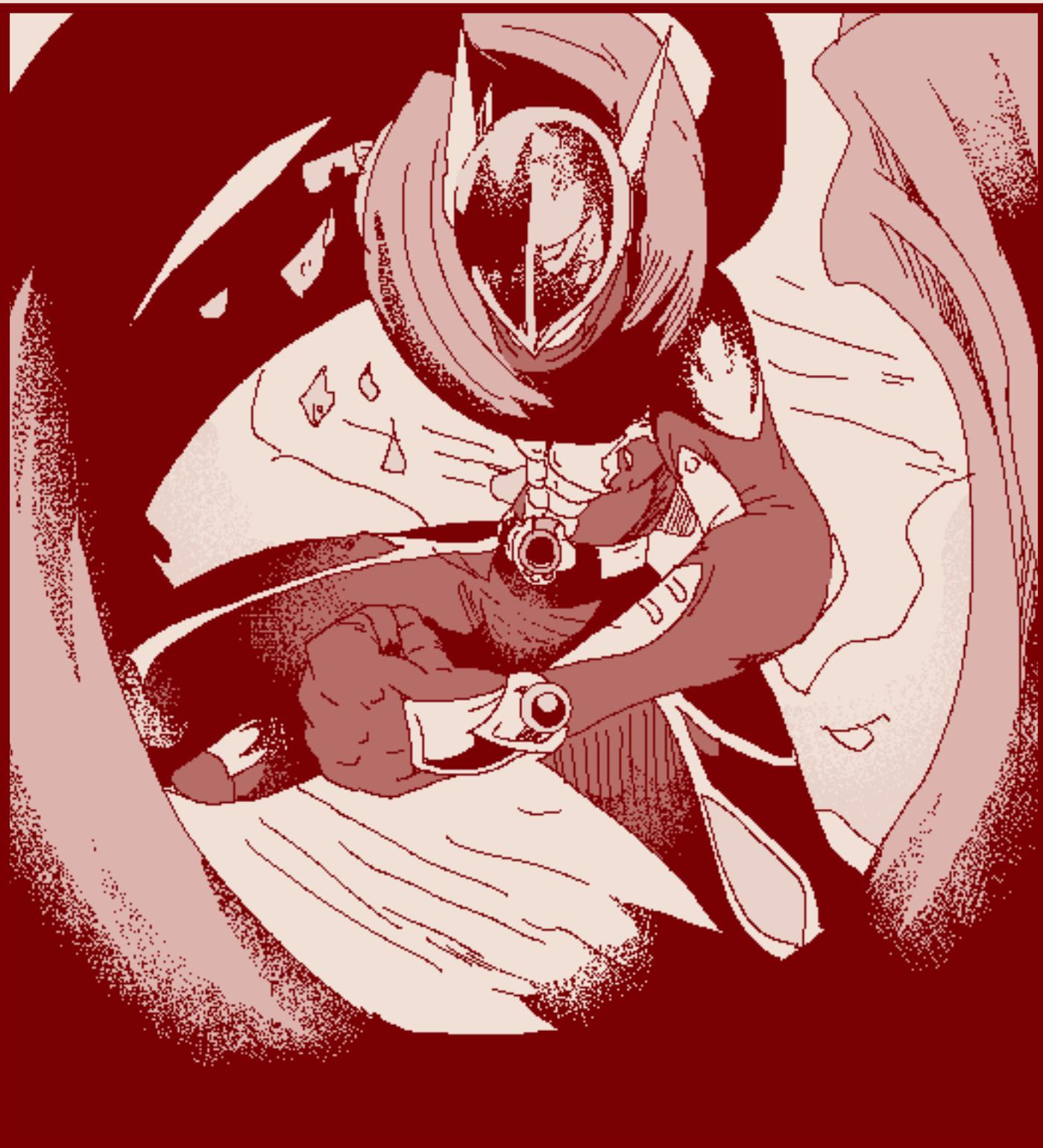
それに、ハシュマモンは一瞬だけだが動搖した。

「頑張れ!!! ジャスティモン!!!! 土井さん!!!!」

内側から状況を傍観するしかない筈の勇太が叫び声が上がっていた。

(マトリックスエヴォリューションのシンクロが揺れた?…こいつ。)

土井 健太郎の胸に火が付いた。



6

(先輩…あんたは言ったな、右手のないヒーローがいるかって…。)  
「…いるさ!!!ここに!!!!!!」



！」

「でりゃ!!!!おら!!!!ほ！はっ!!!!でりやああああ!!!!!!」  
(なんだこいつ!?)

先程のように確かに一方的な闘いが続くと思った。  
最初は、確かにそうであったが徐々に、ジャスティモンの放つ拳が、蹴りがハシュマモンを捉え、ついに有効打が入りはじめた。

「でりやああああああああああああああ!!!!!!」  
ヒーローとは言えない、洗練さを欠いたとても泥臭い拳であった。  
しかし、それが遂にハシュマモンの胸部を撃ち抜いた。

(なんだ!?この拳!?一気に勇太とのシンクロが剥がれる!?そういう事か!!)

「はあはあ…。」

(あいつのディーアークに勇太を引っ張って、僕と勇太との融合を剥がそうという事か!!!!)



「お遊びは終わりだ!!!!猿共!!!!!!」

ハシュマモンが右手を構える、大量の炎と雷がビー玉サイズに圧縮されていく。  
「不味いで！すみれちゃん！」

シンドゥーラモンがすみれに呼びかける。

「あんな凝縮されたもんを一気に放出されたらこのロコモンどころか!!この周囲一帯も!!!!」

その言葉にすみれは駆け出していた。

それに続くようにシンドゥーラモンも走り出す。

何が出来るか分からないがそれでも、駆け出さずにはいられなかった。

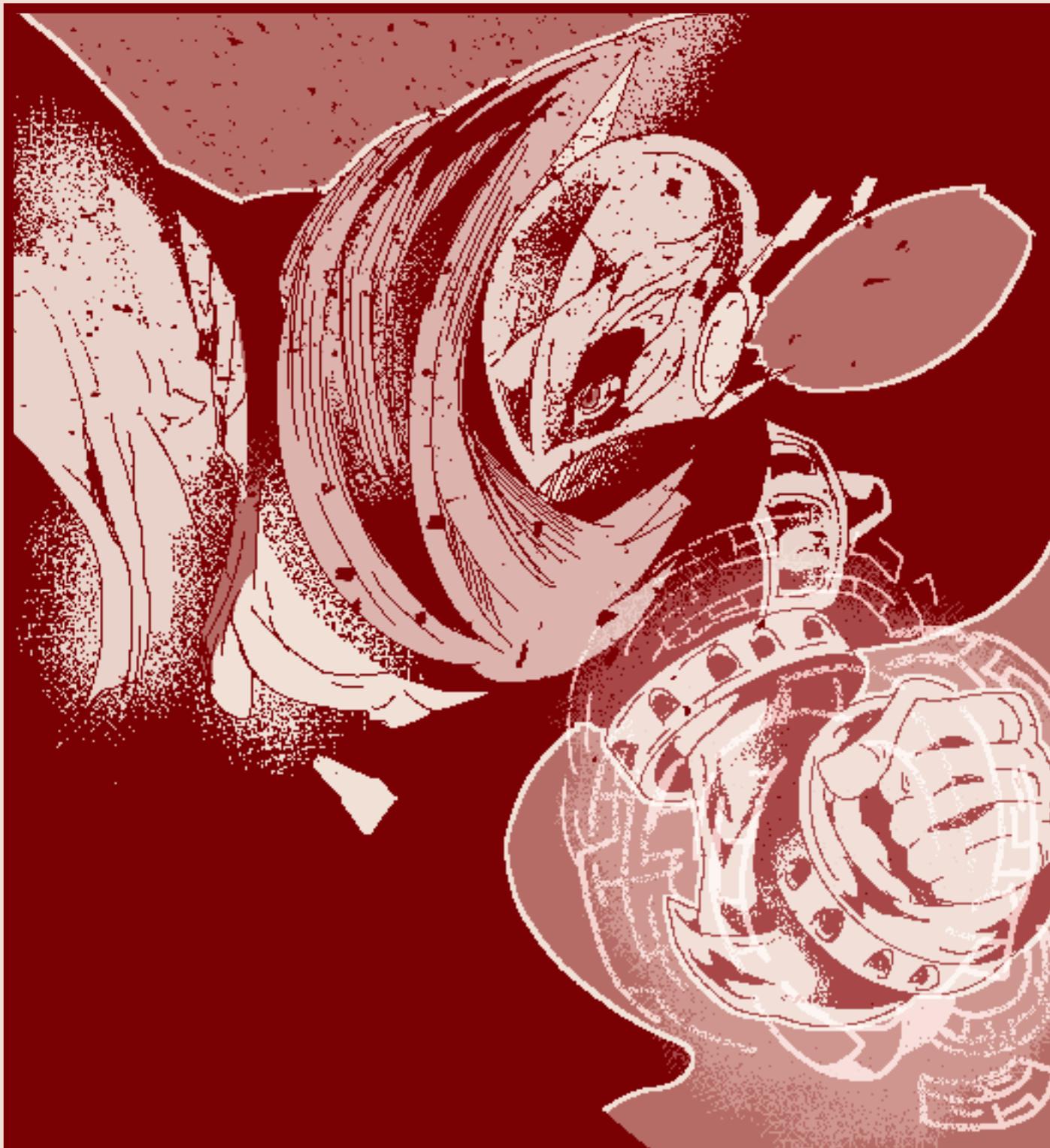
「死ねえええええええええええええええええええええええええええええええええ!!!!!!！」

轟音と光と熱が一帯に広がる、すみれをはじめその場の全員が死を覚悟した。  
「があああああああああああああああああ!!!!!!」

しかし、ジャスティモンが左手だけで放射された熱線を弾き飛ばしすみれ達を守っていた。

「無駄だ!!なんで先は、強くなったかは知らないがこれを並みの究極体が防げるはずないだろ!!!!」





「そうかもな!!!だからって引ける訳ないだろ!!!!!!」

ジャスティモンは一步も引かずに耐えた。

しかし、左手も徐々にデータに分解されはじめていた。

(世の中、ままならねえ事ばっかだ。

右手失っても、得るもんなんて何もなかった。

だがな!勇太には、助けなきゃ!進まなきゃいけねえ道がまだあるんだ…苦しくて辛い道が!

その道を進むには、ヒーローがいるんだ!!

あの時の妹の為に泣かなかったあの時のように!

苦しくても諦めちゃいけない!そんな姿が必要なんだ!強くなれる…気高くなれる!  
誰の心にもいる筈のヒーローを見せなきゃいけねえだろうが!!!)

「だから!だから俺が諦める訳にいかねええんだ!!!!!!」

「「ジャスティモン!!!!」」

ジャスティモンの左手が光輝いていく、アクセルアームに変わっていく。

「!!…帰ってこい!!!! 勇太あああああ!!!!!!」

熱線の中を左の拳が突き進んでいく。

そして、ついにハシュマモンの顔に届き殴り抜ける。

ハシュマモンの融合が剥がれ、ルクスマント勇太に分かれた。

そのままジャスティモンはルクスマントを殴り飛ばす。

「う…ん。」

ルクスモンとの融合が解けた勇太が目にしたもののは、  
「よう…大丈夫…か？勇太？」

「土井さ…!?」

目の前にした健太郎の状態に気付き、どういう状況なのかを理解した。

「そんな…ああ…なんで…!!」

「いいか黙って聞け…勇太、この事は気にするな…。

俺は…俺は生き返ったんだ。

この数分間で…ただ生きたまま腐っていった俺の心は、お前と出会って…。

だから、いいんだ…その礼だ。

それに、お前にはやらなきやいけない事があるんだろう？

光ちゃんに…お前の従兄。

真っ直ぐなお前の目が最初は、嫌だったけどよ…ほっておけなかったんだ。

だらか…いいんだ。」

「駄目だ…！駄目だ！駄目だ!!!」

「サイバードラモンには、謝らねえとな…最後まで付き合わせちまって…。

勇太…お前は…俺みたいになるな…お前は…名前のとおり…真っ直ぐ…。」





健太郎が伸ばした拳を勇太が手に取る。

手に取った瞬間、健太郎は塵になり舞っていった。

起きた瞬間見たのは、自身の手で炭化した健太郎であった。

「あああああああああああああああああああ!!!!!!」

健太郎の全てが塵となって舞った瞬間、勇太は叫び声を上げていた。

それは、意味のある言葉ではなかった。

己に降りかかった出来事、責任を抱えきれず叫び、外に逃がす事でしか自分自身を保てなかつたのである。

「…。」

「…勇太、戻ろう。」

背後に竜馬とすみれが近寄ったが、今の勇太に掛ける言葉が見つからなかつた。